

## 最近に於ける我が國死亡率の

若干の傾向 (豫報) (三)

館 上 田 正 夫  
窪 田 嘉 彰

### 目次

- 一 序
- 二 男子特殊死亡率(以上第一卷第六號所載)
- 三 女子特殊死亡率
- 附 男女特殊死亡率比較(以上第一卷第八號所載)
- 四 括 要(本號所載)

### 四 括 要

我が國最近に於ける死亡率の傾向を、極めて簡単に概観すれば以上の如くであるが、一應、特に氣付いた主要なる事項を列記して稿を閉ぢることとする。

一 死亡率總數の傾向は、從來低下の傾向を示して來たのであるが、昭

最近に於ける我が國死亡率の若干の傾向 (豫報) (三)

和一〇年に至つて一變して停頓、否、寧ろ上昇の傾向に轉じて現在に至つてゐる。此の傾向は男女を通じて共通の現象であり、其の程度も殆んど同様である。

二 今之を年齢別に見れば、男女共に零歳及一歳の死亡率が低下を示せるの外、爾餘の年齢階級に於ては停頓乃至は上昇の傾向を認めるのである。而して、上昇傾向の最も顯著なる年齢階級は、之亦男女共に一五—一九歳の青年人口の死亡率である。又、三歳、四歳、五—九歳、一〇—一四歳等の幼兒死亡率の上昇が著しきことは頗る寒心に耐へざるものがある。更に又、二〇—二四歳、二五—二九歳及三〇—三四歳の壯年人口の死亡率が依然として憂慮すべき傾向を辿つてゐることは注意を必要とする。尙又、事變發生以後に於ては四〇歳以上の高次年齢死亡率、就中、老年人口死亡率の上昇が極めて顯著であることを附言しなければならぬ。

三 次に主要死因別に特に上昇の顯著なるものを見れば、前項の年齢別死亡率の傾向によつて容易に推測せられ得る通り、男女共に第一に注意すべきは「結核」死亡率の著しき上昇である。次に「肺炎」死亡率の上昇が顯著であるが、此の中には「結核」死亡が不勘混入してゐることを推定し得るのであつて大いに注意を必要とする。又次に二歳以上の「下痢、腸炎及腸潰瘍」の死亡率が上昇を示してゐることも閑却すべからざる事項であり、「脳出血、腦栓塞及腦血栓」の死亡率が著しく上昇してゐることは高次年齢死亡率の上昇を來してゐると思はれる。

明かに低下を示してゐる死因は、男女共に二歳未満の「下痢及腸炎」と零歳の「先天性弱質」とであつて、乳幼兒死亡率の低下にして死因に關する限り、主として此の二者に歸し得ると見られる。

四 乳兒死亡率が顯著なる低下を示したことは洵に慶賀すべき現象であ

るが、最近の傾向を観察すれば、低下の速度は著しく緩慢になつて來てゐる。尙且つ、三大死因中「肺炎」が傾向として男女共に上昇を示してゐることには注意を要する。かくて乳兒死亡率の低下は最近の傾向に徴すれば決して樂觀を許すものとは云ひ難いのである。

五 男女別死亡率を見るに、〇歳より二歳迄は男子死亡率が女子死亡率より高いが、三歳に至つてその差は殆んどなくなり寧ろ女子死亡率が男子のそれよりも高くなり、以後一五—一九歳に至る迄續いてゐる。然るに二〇—二四歳に至つては男子死亡率が女子のそれを超えてゐる。二五—三九歳の各年齢階級に於ては更に女子死亡率が男子のそれを超え、四〇歳以後の各年齢階級に於ては男子死亡率が女子のそれより高率となつてゐる。從來二〇—二四歳の年齢階級に於ても女子死亡率が男子死亡率より高かつたのであるが、昭和一〇年乃至一二年に於て男子死亡率と其の地位を轉換してゐることは、第六回生命表に見らるる男女死亡率の轉換と併せ考へて頗る注意を要する事實である。かゝる男女別死亡率の轉換は、女子死亡率の低下改善によるよりは寧ろ男子死亡率の上昇によつて生ぜしこと上掲「統計時報」(第九八號)の所論の通りである。而も此の年齢階級に於ける死亡の五割以上が「結核」によるものであり且つ明瞭な上昇傾向を示せることは憂ふべき事態である。

六 次に主要死因別死亡率の傾向について、男女別及年齢別に注意すべき事項を列記すれば次の如くである。

- (1) 「結核」 男は一〇歳乃至四九歳、女は五歳乃至四九歳の何れの年齢階級に於ても主要死因中の首位を占め且つ何れも上昇の傾向を示してゐる。殊に男女共一五歳乃至二四歳に於ては死因中に占める割合が大なるのみならず死亡率も甚だ高く且つ極めて著しき上昇を示せるは最

近結核の慘禍が下位年齢階級にも擴大されつゝあるものとして甚だ憂慮に耐へぬ。一〇歳乃至一九歳女子の死亡率が男子に比し著しく高きことは就中注目し値する。

- (2) 「肺炎」 男女を通じ殆んど何れの年齢階級の主要死因中にも現はれ且つ上昇を示す。特に男一〇—一九歳、三〇—三九歳、女三〇—三九歳の各年齢階級に於て顯著な上昇傾向を示してゐる。既に指摘した通り此の死因中には結核性疾患の混入を推定し得るを以て、かゝる上昇傾向は頗る戒心を要することと云はねばならぬ。

- (3) 「腦出血、腦栓塞及腦血栓」 男女共總數の死亡率が頗る著しき上昇を示してゐるが、これは男五〇—五九歳、女三五—五九歳の各年齢階級に於て明瞭な上昇傾向を示せる爲である。特に昭和一三年に於て此の傾向が著しい。

- (4) 「腎臓炎」 男は五〇歳以上、女は三〇歳以上に於て主要死因中に占める地位が上り、何れも上昇の傾向を示すが、特に男女共三五—三九歳の年齢階級に於て著しい。

- (5) 「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」 男女共總數の死亡率が頗る顯著な上昇傾向を示してゐるが、これは専ら二—四歳の各年齢階級に於ける上昇の爲である。特に、二—四歳の各年齢に於ては何れも主要死因の首位にあり、總死亡の二割を占め、而も著しい上昇傾向を示せるが爲である。後期に於て此の年齢の死亡率を高めてゐるものは主として此の「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」の上昇によるものと思はれ、幼兒死亡を論ずるに當り第一に注目すべき現象であらう。

- (6) 「不慮の傷害」 男に於ては二歳以上の各年齢階級の主要死因中年齡の高まるに伴ひ其の地位を高め、一五—三九歳の各年齢階級に於ては

常に「結核」に亞いで第二位を占めてゐる。五—九歳、一五—一九歳に於て上昇傾向が著しい。これに反し女に於ては僅に二歳、三歳、五—九歳の主要死因中に現はれるに過ぎぬ。

(7) 「脳膜炎(結核性を除く)」 男女共二〇歳以上に於ては主要死因中に現はれず、五—一四歳の各年齢階級に於て重要死因となつてゐる。男一五—一九歳、女五—九歳に於て明瞭な上昇傾向を示してゐる。

(8) 「其の他の消化器の疾患」 男四歳、一五—一九歳、女二〇—二四歳の各年齢階級に於て明かな上昇傾向を示し、常に男子に於て女子より

も高率である。

以上の如く、少くとも人口統計學的に考察する限り、我が國最近に於ける死亡率の傾向は、遺憾ながら、決して良好なりとは云ひ得ないのであつて寧ろ多々寒心に耐へざる事實があり、今後の死亡率の動向に關し、不斷の調査研究を怠つてはならないと共に大いに此際戒心を必要とするものと云はなければならぬ。尙、最後に本稿通讀の便宜の爲主要死因につき男、女年齢階級別に其の各々の占める地位に關する一覽表を作成したから左に附録しておくこととする。(完)

附録

第一表 昭和一〇年に於ける死亡二萬以上の主要死因別死亡率の年齢階級別順位 (死亡率大なるものより)

死因	年齢階級	死亡人数		死亡率	
		男	女	男	女
總數	〇歳	60	60	1.5	1.5
	60歳以上	100	100	1.5	1.5
結核	〇歳	60	60	1.5	1.5
	60歳以上	100	100	1.5	1.5
一 呼吸器の結核	〇歳	60	60	1.5	1.5
	60歳以上	100	100	1.5	1.5
二 其の他の結核	〇歳	60	60	1.5	1.5
	60歳以上	100	100	1.5	1.5
三 腦出血、腦栓塞及腦血栓	〇歳	60	60	1.5	1.5
	60歳以上	100	100	1.5	1.5
四 肺炎	〇歳	60	60	1.5	1.5
	60歳以上	100	100	1.5	1.5
七 老衰	〇歳	60	60	1.5	1.5
	60歳以上	100	100	1.5	1.5
八 先天性弱質(二歳未満)	〇歳	60	60	1.5	1.5
	60歳以上	100	100	1.5	1.5

最近に於ける我が國死亡率の若干の傾向 (豫報) (三)



# 梅毒蔓延状況の地方別観察

横 田 年

五—一九歳	男	三二	三二	八	四	九
一〇—一四歳	女	二二	三〇	八	九	五
一〇—一四歳	男	二二	三〇	八	九	五
一五—一九歳	女	二二	三〇	八	九	五
一五—一九歳	男	二二	三〇	八	九	五
二〇—二四歳	女	二二	三〇	八	九	五
二〇—二四歳	男	二二	三〇	八	九	五
二五—二九歳	女	二二	三〇	八	九	五
二五—二九歳	男	二二	三〇	八	九	五
三〇—三四歳	女	二二	三〇	八	九	五
三〇—三四歳	男	二二	三〇	八	九	五
三五—三九歳	女	二二	三〇	八	九	五
三五—三九歳	男	二二	三〇	八	九	五
四〇—四九歳	女	二二	三〇	八	九	五
四〇—四九歳	男	二二	三〇	八	九	五
五〇—五九歳	女	二二	三〇	八	九	五
五〇—五九歳	男	二二	三〇	八	九	五
六〇歳以上	女	二二	三〇	八	九	五
六〇歳以上	男	二二	三〇	八	九	五
備考	四—麻疹					
	二—二十—結核					
	三〇—腸膜炎(結核性を除く)					
	四〇—慢性心臓内膜炎及心臓瓣膜の障害					
	四九—肋膜炎					
	五三—下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)					
	五九—腎臓炎					
	七七—其の他幼若乳児固有の疾患(三箇月未満)					
	七九—自殺					
	八五—不明の診断及不詳の原因					
	九一—赤痢及疫痢					
	一八—癌、其の他の悪性腫瘍					
	三二—腦出血、腦栓塞及腦血栓					
	四八—肺炎					
	五二—下痢及腸炎(二歳未満)					
	五八—其の他の消化器の疾患					
	七四—先天性弱質(一歳未満)					
	七八—老衰					
	八一—不慮の傷害					

## 梅毒蔓延状況の地方別観察

保健衛生の見地から人口増殖を阻碍する最大なるものとして乳児死亡・結核・性病の三者が算へられる。その何れに於ても今後の調査研究を要する問題が山積してゐるのであるが、就中性病は人々の恥辱とし隠蔽せんとする疾患である爲調査が容易でない。性病は之を梅毒・淋疾・軟性下疳・第四性病の四大性病に分類するのが普通であるが、此の内、人口増殖を阻碍する事最も甚しいものは淋疾である。淋疾は不妊症の大なる原因となり又屢々早期流産を來すのである。従つて淋疾の蔓延度は最も調査を希望されてゐるのであるが、未だ皮膚反應・血清反應等により適確に淋疾の診断を行ふ事が不可能であり、局所検査は特殊なる場合(徴兵検査、娼妓業態者検査)を除き一般人に對し施行する事が出来ぬ爲此の調査を行ふ事は當分見込がない。

従つて淋疾蔓延度に就ては壯丁検査に於ける花柳病検査成績を除き今日迄何等の文獻もないのであるが、淋病や梅毒は本邦に渡來してから既に數百年以上を経て居り、大體に於て淋疾の蔓延してゐる地方には梅毒も同じ様に廣つてゐると考へても差支へないであらう。

従つて梅毒蔓延状況を考察する事により間接に淋疾の蔓延状態を推測する事が出来やう。(他の性病の内、軟性下疳は矢張り大體に於て梅毒及び淋疾と並行して普及してゐると考へて良いであらう。第四性病即ち鼠蹊淋